人文会ニュース

jinbunkai news

April 2021

NO. 137

1 15分で読む
ナポレオン没後二百年 楠田悠貴

18 書店現場から
コロナ禍での書店イベント 森暁子

24 図書館レポート
図書館から広げる電子書籍 花田一郎

34 編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑲
『近代日本宗教史』と宗教学 水野柊平

39 編集者が語るこの叢書・このシリーズ⑳
シリーズ『日本宗教史』と人文学 石津輝真

www.jinbunkai.com

思考力改善ドリル
批判的思考から科学的思考へ
植原 亮
クイズ感覚で問題を解いてクリティカル・シンキングの力を養い、科学リテラシーがぐんぐん身につく！
税込2200円

パンデミックの倫理学
緊急時対応の倫理原則と新型コロナウイルス感染症
広瀬 巌
新型コロナウイルスの世界的流行をとおして表面化した倫理的な問題を考える筋道をわかりやすく示す。
税込1980円

哲学から〈てつがく〉へ！
対話する子どもたちとともに
森田伸子
子どもたちが豊かな対話をとおして思考を深める様子を描き、学校における哲学教育のあり方を考える。
税込2420円

勁草書房（けいそう） TEL 03-3814-6861 FAX 03-3814-6854
〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
http://www.keisoshobo.co.jp

学問の自由が危ない
日本学術会議問題の深層
たちまち重版！

これはもはや、学問の自由のみならず、民主主義の危機！

この問題の背景にあるものは何か？多彩な執筆陣が繰り広げる、学問の自由と民主主義をめぐる白熱の論考集。

佐藤学 上野千鶴子 内田樹 編 1870円

晶文社 〒101-0051 千代田区神田神保町1-11
Tel.03-3518-4940 Fax.03-3518-4944

最新の研究成果を反映させた待望の第三版！

仏典解題事典

斎藤 明・丸井 浩・下田正弘・蓑輪顕量・梶原三恵子・高橋晃一・加藤隆宏 編集

インド・チベット・中国・朝鮮・日本の仏教と、それに関連するインドの聖典まで網羅した『仏典解題事典』を、最新の研究を踏まえて内容を補筆・修正し、新規項目も追加した全四四七項目に及ぶ解題事典の決定版。

8250円（税込）

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6
☎03-3255-9611 FAX 03-3253-1384
○web春秋 はるとあき 人気連載更新中！
https://haruaki.shunjusha.co.jp/ ⇒

大人の発達障害の真実
診断、治療、そして認知機能リハビリテーションへ
傳田健三 著 なぜ大人になるまで障害は見落とされてきたのだろうか？大人の発達障害に悩む患者の実態と特徴、適切な診断と対応―心理教育、二次障害の治療、薬物・精神療法、リハビリテーション―の全てを網羅。2640円

心理療法統合ハンドブック
日本心理療法統合学会 監修 杉原保史・福島哲夫 編
学会の設立メンバーによる書き下ろし。日本のこれからの心理療法の統合のあり方を示す決定版。最新理論もトピックスにて提示。3960円

記憶の心理学
基礎と応用
ガブリエル・A・ラドヴァンスキー 著
川崎惠里子 監訳 基礎研究と理論から、日常生活での応用的側面まで記憶研究の基本トピックを幅広くカバー。この一冊で医学、法学、教育学等関連分野でも活用できる。9900円

誠信書房 SEISHIN SHOBO Tel 03-3946-5666
東京都文京区大塚3-20-6

―15分で読む―

ナポレオン没後二百年

楠田 悠貴（フランス革命史）

はじめに

ナポレオンの最大の功績は何か？　こう問われたとき、皆さんはどのように答えるだろうか。数々の戦いに勝利して、ヨーロッパの大部分を支配下に置いたことだろうか。ヨーロッパにナショナリズムと自由主義の新しい時代をもたらしたことだろうか。ナポレオン自身は民法典（ナポレオン法典）こそ未来永劫と続く最大の功績だと述べている。[*1] 近代国家の礎を築いたと答える方もいるかもしれないし、革命の混乱を収束させたことだと考える方もいるだろう。実に様々な答えが返ってきそうだ。ナポレオンは数々の功績をあげ、ひとつの時代（ナポレオン時代）を形成した人物である。歴史家パトリス・ゲニフェは、数々の賞を受賞した伝記『ボナパルト』の序文で、〈彼の伝記〉と〈彼の時代の歴史〉を区別することの難しさを指摘している。[*2] つまり、「ナポレオンが世界をどのように変えたのか？」という問いは、ある程度「ナポレオンが生きた時代に世界がどのように変わったのか？」と問うに等しいわけだ。世界の偉人でお馴染みのジャンヌ・ダルクやトーマス・エジソンとは、性質が異なると言えるだろう。実際のところ、ナポレオンの生涯は、五十一年間とそれほど長くない。しかし、この間に世界は大きく変わった。その変化は、政治、戦争、社会、経済、文化など、あらゆる分野に及んだ。シャトブリアンは、「この四半世紀［フランス革命とナポレオン時代］

は数世紀に匹敵する」と記している。[*3]

ナポレオン財団は、ナポレオン没後二百年に当たる今年二〇二一年を「ナポレオン・イヤー（アネ・ナポレオン）」と銘打ち、ゆかりのある場所を中心に、展示会や記念式典など毎月いくつものイベントを共同で開催している。[*4] 新型コロナウイルスのパンデミックの影響が懸念されるが、フランス各県はもちろん、生地コルシカ島や晩年を過ごした英領セント＝ヘレナ島、ナポレオンが最後の敗北を喫したベルギーのワーテルロー、大陸軍（グランド・アルメ）（ナポレオン軍）の退役兵が独立戦争を戦ったチリなど、まさに世界規模で開催されている。本稿では、彼の死から二百周年を目前に、その生涯と遺産を振り返ってみたい。

コルシカのパトリオット・ナポレオーネ・ブオナパルテ

ナポレオンがどれほどの手腕を持ち、どれほど大きな野望を抱いていたとしても、彼がヨーロッパの支配者になったのは、かなりの程度状況の産物だった。そもそも彼は生粋のフランス人ではない。コルシカ島のアジャクシオ生まれである。コルシカ島は、彼が生まれる前年の一七六八年にイタリア半島のジェノヴァ共和国からフランスへと委譲され、独立の機運が燻っていた。それゆえナポレオンの母語はイタリア語に近いコルシカ語であり、若い頃は「ナポレオーネ・ブオナパルテ」と綴っていた。彼がフランス本土に航ったのは一七七九年、彼が九歳のときである。フランスに帰順した父の意向だが、コルシカの青年はイタリア半島に留学するという伝統から見れば型破りだった。コルシカ語訛りの青年は「よそ者」として揶揄われ、ブリエンヌ兵学校、パリ士官学校では孤立した学生時代を送ったとされる。一七八五年十一月、士官学校を卒業した彼は、ヴァランスのラ・フェール砲兵連隊に配属され、退屈な実地訓練を積みながら、読書と執筆に明け暮れる日々を過ごした。当時、ボナパルトはまだ自分がコルシカ人だと考えていたようだ。この頃執筆した『コルシカ史』のなかでフランスによる島の占領を糾弾し、また革命前夜の手紙から独立運動の指導者パスクワーレ・パオリ（パスカル・パオリ）を英雄視していたことがわかっている。そんな彼が後にフランスの統治者、ないしヨーロッパの覇者になろうとは、まだ誰も予想しなかっただろう。

ボナパルトの運命を大きく変えたのは、一七八九年に勃発したフランス革命である。これ以降、貴族将校の亡命が相次いで将校のポストが空いたうえに、革命戦争が始まると実戦能力が重視されるようになって、彼が出世する道が開けた。コルシカ島では、一七九〇年夏にパオリが亡命先のイギリスから帰還して県行政府首長に就任し、独立問題が再燃した。革命を支持し、たびたび帰省したボナパルトであったが、パオリや島民たちは革命の過激化にともなって革命に批判的になり、ボナパルトとの亀裂が深まっていった。一七九三年四月、ナポレオンの弟リュシアンの告発に基づいて国民公会が親英派パオリの召喚を決定したことで、ついに島の大多数を占めるパオリ派の住民がボナパルト家の屋敷を襲撃した。ボナパルト一家は島を脱出し、六月に地中海沿岸の都市トゥロンにたどり着いた。ナポレオンがフランス人として生きていくことを決めたのは、おそらくこのときであろう。一七八九年から三度もコルシカに帰省していたが、これ以降、一七九九年のエジプト遠征の帰還時に立ち寄ったのを除いて、二度とコルシカの土を踏むことはなかった。

ボナパルトからナポレオンへ

一七九三年十二月、ボナパルトは、国民公会から派遣された議員団によって砲兵隊司令官に任命され、イギリス軍に占領されたトゥロン港を奪還する功績をあげ、二十四歳の若さで准将に昇級した。その後、テルミドールのクーデタの際には、オギュスタン・ロベスピエール（マクシミリアンの弟）との関わりによって一時的に拘束されたがすぐに釈放され、一七九五年十月五日（葡萄月十三日）に彼の名は一躍有名になった。国民公会議員ポール・バラスの副官に指名されて王党派の蜂起鎮圧の指揮をとり、パリの街中で広範囲に被害の及ぶぶどう弾を放つという常識では考えられない大胆な行動でこれをなし遂げ、「ヴァンデミエール将軍」として取り沙汰されたのである。まもなく新政府の総裁の一人となったバラスは、一七九六年三月、ボナパルトにイタリア方面軍最高司令官の大役を命じ、彼はバラスの愛人の一人であった未亡人ジョゼフィーヌ（本名マリ＝ジョゼフ＝ローズ）と結婚してから出征した。ボナパルトはローディや

リヴォリでオーストリア軍に勝利を収め、カンポ＝フォルミオの和約を結んで第一次対仏大同盟戦争を終結させる大活躍を収めた。莫大な戦利品（美術品）と賠償金をフランスにもたらし、一七九七年十二月のパリ帰還では「英雄」として歓呼で迎えられた。一七九八年五月、今度はイギリスの交易路を断つべくオスマン帝国支配下のエジプトに遠征した。七月ギザでマムルーク軍に勝利を収めたが（ピラミッドの戦い）、翌月ホレーショ・ネルソン麾下のイギリス海軍にアブキール湾に停泊中のフランス艦隊が壊滅させられた（ナイルの海戦）。その後、オスマン帝国の参戦とペストの流行でエジプト・シリア戦役に手こずっていたが、ボナパルトは国内の政情不安の報を受け、一七九九年十月に部隊を残したままパリに戻った。彼はオリエントの覇者として歓迎されたが、残された部隊は後に敗北している。

一七九九年霧月（ブリュメール）十八日（十一月九日）、エジプトから帰国したボナパルトは、『第三身分とは何か』の著者として知られるエマニュエル＝ジョゼフ・シィエスのクーデタ計画に参加して総裁政府を打倒し、軍事力を背景に彼を押しのけて新政府の第一統領に就任した。ボナパルトは政治家の領域に踏み込むことになっただけでなく、いきなりその頂点に立ったのである。このとき、彼は三十歳だった。新憲法を人民投票にかけ承認を得て革命の終結を宣言し、ローマ教皇との宗教協約（コンコルダ）締結のほか、フランス銀行の設立、各県知事の配置、リセ（中等教育機関）の創設、レジオン・ドヌール勲章の創設など国内改革を矢継ぎ早に行い、ヴァンデ反乱軍との講和や亡命者（エミグレ）への恩赦など革命の混乱を収束に向かわせた。この間も、彼は第二次イタリア遠征を行って、一八〇〇年六月にマレンゴの戦いでオーストリア軍に勝利し、一八〇二年三月には最大の敵イギリスともアミアンの和約を結び、ヨーロッパに束の間の平和が訪れた。一八〇二年八月、ボナパルトは再び人民投票を行って終身統領に就任し、新通貨ジェルミナル・フランの発行、「フランス人の民法典」（ナポレオン法典）の公布などで国家制度を整えた。そして一八〇四年五月、人民投票を経て「フランス人の皇帝」に就任した。これ以降、彼は「ボナパルト」ではなく、「ナポレオン（一世）」と呼ばれる。十二月には教皇ピウス七世をノートルダム寺院に呼びつけて、自らの手で自らの頭上に戴冠した。飛ぶ鳥を落とす勢いと

はこのことである。

皇帝ナポレオン一世

皇帝となってからも、ナポレオンは戦争をやめなかった。一八〇五年十二月、アウステルリッツでロシア皇帝アレクサンドル一世とオーストリア皇帝フランツ一世（神聖ローマ皇帝としてはフランツ二世）を打ち負かし、翌年七月、神聖ローマ帝国を解体してライン連邦を設立した。これを脅威とみたプロイセンを十月イエナ・アウエルシュテットで撃破し、一八〇七年六月にはフリートラントでロシア軍を、一八〇九年七月にはヴァグラムでオーストリア軍を打ち負かした。ナポレオンは征服地に次々と傀儡政権を樹立して兄弟や元帥を王位に就け、ヨーロッパの大部分を支配下に置いた。陸上では連勝を重ねたナポレオンだったが、ブリテン諸島にはどうしても手を出せなかった。一八〇五年十月、ネルソン麾下のイギリス海軍がスペインのトラファルガル岬沖でフランス・スペイン連合艦隊を壊滅させている。一八〇六年十一月にはベルリンから大陸封鎖令を発して同盟国とイギリスの交易を禁じたが、フランス産業がイギリスに取って代わることはできず、各国の離反を招いた。また、嫡子のできなかったジョゼフィーヌと離婚し、一八一〇年春にオーストリア皇女マリア・ルイーザ（マリ・ルイーズ）と結婚した。翌年には皇帝の期待通り、世継ローマ王（ナポレオン二世）が生まれた。

一八一二年、フランス帝国は最大版図に到達したが、彼の権力基盤はもっぱら軍事的威光に依拠していた。帝国はそれを失った瞬間、瞬く間に崩壊するのである。一八〇八年以降、ナポレオンの兄ジョゼフ（ホセ一世）のスペイン王就任に憤慨したスペイン民衆のゲリラ抵抗に手を焼いていたが（半島戦争）、最大の転機はロシア遠征の失敗であった。一八一二年六月、ナポレオンは大陸封鎖令への違反に報いるべく約六十万の軍隊を率いて出征し、ボロディノ（モスクワ川）の戦いで甚大な被害を被りながらかろうじてモスクワに入城したものの、モスクワの大火によって凍てつく寒さと食糧難のなかすぐに撤退せざるを得ず、最終的に帰ってこられたのは数万人だった。ナポレオンの苦戦を聞いた各国は、再び対仏大同盟を結成して立ち上がり、一八一三年十月ライプツィヒで

彼を打ち負かし（諸国民の戦い）、翌年一月パリへと進んだ。ナポレオンが退位してエルバ島へと流され、五月ルイ十八世が亡命先から帰還することで、約二十二年ぶりにフランス・ブルボン王朝が復古した。

しかし、ナポレオンの物語はエルバ島で終わることはなかった。ナポレオン戦争後の混乱を収束させるべく、各国の代表がウィーンに集まって話し合っているさなか、一八一五年二月ナポレオンはエルバ島を脱出し、軍勢を形成しながらパリへと向かった。この知らせを聞いたルイ十八世は再び逃亡し、ナポレオンは名望家の支持を得るべく自由主義的な帝国憲法付加条項を制定したが、六月、ワーテルローで対仏大同盟軍に敗北を喫した。今度は二度と帰国できないように、南大西洋に浮かぶ絶海の孤島セント＝ヘレナ島へ流された。この束の間の復帰は、「百日天下」と呼ばれている。

死から伝説へ

一八二一年五月五日、ナポレオンは英領セント＝ヘレナ島で五十一年間の生涯を閉じた。死因は父親と同じ胃癌だったとされているが、毒殺を支持する声も根強く、今日に至るまで様々な噂が絶えない。また実際は生きているという噂もあり、十九世紀にはナポレオン本人と称する人物がたびたび現れた。

ブルボン復古王政にとってナポレオンは敵であり、とりわけ百日天下の加担者は国外追放の対象とされた。フランス社会全体を見ても、戦禍の直後には「人喰い鬼」など、彼に批判的な言説・イメージが目立った。ナポレオンは甚大な人的犠牲を払いながら、最終的に敗北したのである。しかし彼の死後、その偉大さを讃える「ナポレオン伝説」が民衆やリベラル派のエリートのなかに浸透していく。その際に大きな役割を果たしたのが、侍従ラス・カーズが島でナポレオンの語りを記録した『セント＝ヘレナ回想録』（一八二三年刊行）である。（紙の上では）哀れな流刑生活を送ったナポレオンに同情を集めるとともに、単に軍人としてではなく「革命の子」としての解放者のイメージを流布し、反動的な政治体制に不満を持つ者たちのあいだで大きな共感を呼んだ。こうして、ボナパルト家の帝位復活を目指すボナパルティスムがフランスで台頭していくのである。

一八三〇年、七月革命によって成立した、オルレアン家のルイ・フィリップを国王に戴く七月王政は、自身の正統性を損なうことなく、共和派、正統王朝派（ブルボン派）、ボナパルト派の三者をそれぞれ満足させなければならないという難しい立場にあった。ボナパルト派に対しては、騒擾に発展しないように抑制しつつ、ヴァンドーム広場の記念柱への皇帝像の再設置（一八三三年）、エトワール広場の凱旋門の完成（一八三六年）、ナポレオンの遺骸の帰還（一八四〇年）などを行ったが、これらが結果としてナポレオン熱を高めたとされる。すでにナポレオン一世の実子ライヒシュタット公（ナポレオン二世）は死に彼自身の子孫は途絶えていたが、第一帝政崩壊以降国外で亡命生活を送っていた甥のルイ・ナポレオンがフランスの君主となることを夢見て二度反乱を起こし失敗していた。彼が脱獄と国外逃亡の後、一八四八年の二月革命に際して帰国し、フランスの議員となったのである。さらに彼は、一八四八年十二月の選挙で圧勝して大統領となり、一八五一年十二月にはクーデタを起こし、翌年人民投票での圧勝を経て皇帝に就任した。彼は、ドイツ語訛りのフランス語を話し、ほとんど地盤を持っていなかったのだが、主に農民層を中心に広まっていた軍事的・政治的救世主としてのナポレオン一世への追憶が、フランスをもう一度帝政にしたのである。彼は、伯父と同じ十二月二日に戴冠するなど伯父の威光を利用したものの、伯父の影に隠れてしまうことを恐れてか、在位中にはそこまでナポレオン伝説の称揚に熱心ではなかった。一八七〇年、ビスマルクの外交手腕に圧倒された彼は普仏戦争中にスダンで捕虜となり、第二帝政はあっけなく崩壊した。その後、ボナパルト家は政治の表舞台から退いていき、今日彼らが再び歴史を大きく動かすことは、あまりなさそうである。

ナポレオンの実像？

では、いったいナポレオン・ボナパルトとはどのような人物だったのだろうか。これは難しい問いだ。彼について語られたことは非常に多く、それらがしばしば矛盾するからだ。「語られたことすべてを信じようとすれば、一人ではなく、二、三人のボナパルトが存在したと考えなくてはならない。もし十分に裏づけのとれたものだけ

を認めるならば、一人も存在しないのではないかと疑わざるを得ないだろう」というリチャード・ホエートリーの言葉が、多くを物語っている。[*5] また、絵画もあまり信用できない。フランス国立図書館は五千を超える彼の版画を保管しているが、写真のようにありのままの姿を捉えようとしたものはなく、政治的意図を持って描かれたものばかりである。ナポレオンの表象を分析した美術史家アルマン・ダイヨは、「どうしてもボナパルトを描いた肖像画のほとんどが、謎に満ちた仮面を被ったこの人物と似通っていない絵になる」と述べている。[*6] そもそもジャン・チュラール（現フランス学士院会員、パリ＝ソルボンヌ大学名誉教授）が現れる一九六〇年代まで、ナポレオンは実証主義歴史学の主たる研究対象ではなかった。

ナポレオンの実像に迫る難しさの最大の理由は、彼自身が情報操作（プロパガンダ）に心血を注いでいたからである。今日ナポレオンと聞けば、多くの日本人がジャック＝ルイ・ダヴィドが描いたグラン＝サン＝ベルナール峠を越える勇姿を思い浮かべるのではないだろうか。しかし、これは創られたイメージに過ぎない。ダヴィドは、実際はラバで難儀したアルプス越えを、白馬で颯爽と登る将軍として描き、左手前の岩に名前が刻まれたカール大帝やハンニバルのアルプス越えになぞらえたのである。半世紀後にポール・ドラロシュが描いた絵画と比べれば、違いは歴然である。皇帝就任後も、自身の政治的栄光を称揚すべくダヴィドを主席画家に任命し、聖別式（戴冠式）の様子を描かせることで世襲君主として印象付けたが、この作品についても、母レティツィアが出席していたかのように描かれるなど史実に反する点が複数指摘されている。またダヴィドの弟子アントワーヌ＝ジャン・グロは、ナポレオンがヤッファのペスト患者に触れる姿を描き、彼が歴代フランス王と同じように病気を治癒する神秘的な能力を持っていたと思わせている。新古典主義の画家たちは、他にも戦争を指揮する勇姿や現人神のごとく着飾った皇帝の姿を描いており、ナポレオンの神格化に大きく貢献した。また、文学青年だったナポレオンは、帰国中でも出征先でも自ら筆をとって喧伝活動を行った。民間人や兵士に無料で配布された『イタリア方面軍通信』では、事実とフィクションを巧みに交ぜながら大胆な自己賛美を行って、勝利に導く天才的指揮官というイメージを創り上げている。彼の印象操作はセント＝ヘレ

ナ島でも続き、ラス・カーズを通して「革命の子」のイメージを刷り込んだ。エジプトで「四千年の歴史が諸君を見下ろしている」と語って兵士を鼓舞したというのも、ラス・カーズの本が初出だとされる。[*7]

後世の評価

彼自身の印象操作が奏効したとも言えるが、フランスから遠く離れた日本では、ナポレオンは一般に「英雄」というイメージで描かれ、おおよそ肯定的な評価がなされている。しかし世界に目を向ければ、ナポレオンの評価は毀誉褒貶である。いまだにスペインのような被征服地で批判的な意見が根強いと言われ、独裁者・侵略者としてヒトラーに並べられることもある。反対に、列強に分割され消滅していたポーランドはワルシャワ公国として国家領土が復活したために、国歌(「ドンブロフスキのマズルカ」)でボナパルトに鼓舞されるさまを歌っているし、ナポレオンに仕えた退役兵たちが独立を目指して戦った中南米諸国はいまだに大陸軍(グランド・アルメ)兵士を追悼している。しかし、一概に地理的に色分けすることはできない。フランス国内でもナポレオンの賛否をめぐる論争が続いているのである。

フランス共和国元首相リオネル・ジョスパンは、二〇一四年に『ナポレオンの悪』を出版し、奴隷制の復活、革命への背信、独裁的な警察国家の樹立、女性の権利の制限、そして個人的野心のために無数のフランス人の命と国益を犠牲にしたとして、ナポレオンを糾弾した。[*8]とりわけ、アンシァン・レジーム期の制限された戦争ではなく、大量徴兵を行って多くの兵を捨て駒にする戦争を指揮した司令官として、約百万人のフランス人(約五百万人のヨーロッパ人)の命の責任を問う声はいまだにやまない。徴兵制などは革命戦争からの連続を考慮しなければならないわけだが、ナポレオンはこの総力戦の象徴であり続けているのだ。彼が参加していない革命戦争も含めて「ナポレオン戦争」と呼称されることがあるのは、このためである。また、独裁者というイメージも根強い。ジョージ・オーウェルの『動物農場』(一九四五年)はスターリン体制を批判した風刺小説だが、革命を導き独裁者となる豚の名は「ナポレオン」であった。実際に、帝政期には言論の自由が大幅に制限され、出版や演劇に厳

しい検閲がかけられた。また、一八〇〇年十二月二十四日の暗殺未遂事件では、事件と関わりのない急進共和派の人々が国外追放に処され、一八〇四年には無実のアンギャン公が処刑されている。

反対に、ナポレオンを評価する声もある。一九六九年、ナポレオン生誕二百周年式典に出席したジョルジュ・ポンピドゥ大統領は、国民の融和と統合に貢献し、多くの国家制度を打ち立て近代フランスの礎を築いたとしてナポレオンを評価した。なかでも、ナポレオンの言葉通り、民法典が最も高く評価されている。女性を従属的地位に置いたという批判はあるが、法の前の平等、私的所有権の絶対、信仰の自由、人身の自由、労働の自由など、革命の成果を取り入れた近代的なもので、ヨーロッパの征服地はもちろん南アメリカにも広まり、明治時代にはお雇い外国人ボワソナードを通して日本にも多大な影響を及ぼした。また、今日のフランスの様々な行政・司法・教育制度を築いたのも彼である。近代的官僚制度、県(知事)制度、破棄院、国務院、会計院、フランス銀行、レジオン・ドヌール勲章、バカロレア、リセ(高等学校)など、彼が遺した遺産は、今なおフランスに受け継がれている。

ナポレオンがもたらした変化

もちろんナポレオンがもたらした変化はフランス国内にとどまらない。特にヨーロッパの政治地図に及ぼした影響は絶大である。フランスは約百万人もの将兵を失った末に敗北し、ヨーロッパにおける主導的地位が低下した。これに対して、ナポレオンに幾度も勝利を収め、大同盟軍を財政的に支援したイギリスが「パクス・ブリタニカ」と呼ばれる繁栄を誇り、帝国主義進出の先頭を走っていく。また、プロイセンはナポレオンに敗北したのを契機として、シュタインとハルデンベルクのもとで農奴解放や内閣制の樹立などの国制改革、フンボルトの教育改革、シャルンホルストやグナイゼナウの軍制改革を抜本的に遂げ、神聖ローマ帝国なきあとのドイツ統一の中心として台頭していく土台を築いた。さらに忘れてはならないのは、十九世紀ヨーロッパが革命と反乱の時代だという点である。「正統主義」を掲げる反動的なウィーン体制が抑圧を繰り返そうとも、ヨーロッパは自由主義とナショナリズムを求める新たな時代へと

突入していった。一八二〇年、スペインの自由主義者たちは、復古したスペイン・ブルボン王朝に対して蜂起し、半島戦争さなかの一八一二年に制定されたカディス憲法を一時的に復活させた。同憲法は、国民主権、三権分立、男子普通選挙、出版の自由を保障したもので、自由主義者たちの旗印となっていた。また、イタリアのカルボナリ（炭焼党）によるナポリ立憲革命（一八二〇年）、トリノ立憲革命（一八二一年）、そしてポーランドのロシア皇帝に対する反乱（一八三一年）などには、大陸軍（グランド・アルメ）の退役兵が多数参加していたことがわかっている。ロシアでは、一八二五年十二月（デカーブリ）に貴族将校たち（デカブリスト）が皇帝専制主義（ツァーリズム）の打倒と農奴解放を求めて反乱を起こしたが、彼らの中心を担ったのはナポレオンを打倒するためにフランスまで行軍し、西欧諸国の自由主義思想に触れ、自国の後進性と改革の必要性を痛感した者たちであった。

さらに近年注目されているのが、ヨーロッパ外への影響である。アメリカ合衆国はヨーロッパが戦争に明け暮れているさなか、米英戦争（一八一二―一八一五年）でイギリスの干渉を跳ね除けた。これ以降、西欧列強の視線はアジア・アフリカへと向けられ、特にイギリス帝国はインドの支配に本腰を据えていく。また、中米のハイチはナポレオンによる奴隷制復活に対して立ち上がり、一八〇四年に、今日まで続く史上初の黒人共和国を樹立した。アルゼンチン、チリ、コロンビア、メキシコ、ブラジルといったその他の中南米諸国も、半島戦争によって宗主国スペインの政治的求心力が低下したのを契機として、十九世紀の最初の四半世紀にナポレオン戦争の退役兵が参加して次々と独立を勝ち取った。他にも、ナポレオンのエジプト遠征がオスマン帝国の支配する東地中海世界に大きな影響を及ぼした。エジプトは、新総督ムハンマド・アリーのもとで近代化を遂げ、一八三〇年代にオスマン帝国と二度戦って世襲支配権を勝ち取った。また、ヨーロッパから革命の解放理念や民族独立の機運が波及してセルビアが蜂起を起こしたり、南ヨーロッパのギリシャが独立を勝ち取ったりしている。このように、今日の世界はある程度ナポレオンの遺産なのである。

最大の遺産？

民法典やナショナリズムといった遺産はもちろん莫大

だが、ナポレオンの生涯こそ彼が遺した最大の遺産だと述べる者がいる。ナポレオンはセント＝ヘレナ島で「我が人生はなんと小説のようだろうか」と述べたとされるが、[*9] 確かに彼は世界中の多くの作品に題材を提供してきた。ナポレオン財団理事長ティエリ・レンツは、「おそらく十九世紀を代表する文学者すべてが、ナポレオンを題材とした作品を書いている」とまで述べている。[*10] 二十世紀に入ってからも彼の伝記は世界各地で毎年のように書かれており、『時計じかけのオレンジ』の作者アンソニー・バージェスがベートーヴェンの交響曲の四つの楽章に合わせて彼の生涯を描いた『ナポレオン交響曲』（一九七四年）や、彼が影武者を立ててセント＝ヘレナ島を脱出しパリに戻るという設定をしたシモン・レイスの『ナポレオンの死』（一九八六年）などが日本語に翻訳されている。ナポレオンを詠んだ詩も無数にあるが、特にフランス最大の詩人ヴィクトル・ユゴーの生涯と詩作はナポレオン伝説と切り離すことができない。ナポレオンに仕えた将軍を父に持つユゴーは、「ヴァンドーム広場の記念柱に寄せるオード」（一八二七年）など一世にいくつもの詩を捧げ、ルイ・ナポレオンの大統領就任を後押ししたが、彼がクーデタを起こし独裁色を強めると反対に転じ、亡命先から『懲罰詩集』（一八五三年）などを書いて批判し続けた。また、ナポレオンは映画に最も多く登場した歴史上の人物だと言われる。とりわけ評価が高いのは、アベル・ガンス監督が三つのスクリーンを用いて彼の半生を描いたサイレント映画『ナポレオン』（一九二七年）である。同作は一九八一年にフランシス・フォード・コッポラ監督によって音楽演奏付きで蘇った。巨匠スタンリー・キューブリック監督も一九七〇年頃にナポレオンの生涯を描くことを目指して徹底的な調査を重ねたが、残念ながら出資者の辞退などで実現しないまま世を去っている。数年前、スティーヴン・スピルバーグ監督が遺された幻の脚本を用いてテレビシリーズを撮影しようとしたことがあり、もしかしたら近い将来日の目を見るかもしれない。音楽では、パガニーニの《ナポレオン・ソナタ》、ベートーヴェンの《ウェリントンの勝利》（ヴィトリアの戦い）、チャイコフスキーの序曲《一八一二年》（ロシア遠征）、ベルリオーズの《五月五日》（ナポレオンの死）など、西洋各国の名だたる作曲家たちが様々なテーマで曲を制作しているが、ベートーヴェンが皇帝就任の

報に失望し、《ブオナパルテ》から題名を変えたと言い伝えられる《交響曲第三番　英雄（エロイカ）》が最も有名だろう。絵画では、ナポレオンの神格化に大きな役割を担ったダヴィド、ジェラール、グロ、アングルら新古典主義の画家たちが、今日フランスを世界一の観光大国にするのに貢献している。ナポレオンの死後も、オラース・ヴェルネがベッドで横たわる死の姿を、ポール・ドラロシュが連合軍がパリに進軍してきた日に失意で座り込む姿を描くなど、彼は様々なテーマで描かれている。ナポレオンの姿に魅了されてきたのは彫刻家も同じである。皮肉にもワーテルローの勝利者の邸宅跡、ウェリントン博物館に展示されているアントーニオ・カノーヴァの《軍神（マルス）としてのナポレオン》や、オルセー美術館に石膏原型が展示されているフラワソワ・リュードの《永久に目覚めるナポレオン》が名高い。私たちがよく知る《考える人》の作者オギュスト・ロダンも胸像を制作しており、長らく行方不明だったが、近年アメリカのニュージャージー州の市庁舎で発見された。エトワール凱旋門やカルーゼル凱旋門など、戦いを描いたレリーフも数多く残っている。

こうした文化遺産の観点からすれば、日本も例外ではない。藤本ひとみの歴史小説・伝記に親しんだ人、城山三郎の『彼も人の子ナポレオン――統率者の内側』を思い浮かべる人も多いだろう。近年では佐藤賢一がナポレオンの生涯を描き、司馬遼太郎賞を受賞した。また、『ベルサイユのばら』の続編となる池田理代子の『栄光のナポレオン――エロイカ』や長谷川哲也の『ナポレオン――獅子の時代』など、少女漫画・少年漫画の両方の主題になっている。宝塚歌劇団百周年の二〇一四年には、ミュージカル『眠らない男・ナポレオン――愛と栄光の涯に』が上演された。そのほか、ウォーゲームではナポレオン戦争がとりわけ人気の題材らしく、若い世代を中心に親しまれている。こうした文化こそがフランスから遠く離れた日本において、ナポレオンを最も有名な歴史上の人物にしているのだ。ナポレオンに憧れる少年、ジョゼフィーヌの運命に心揺さぶられる女性、元帥たちの布陣を分析する軍人や軍事愛好家、ナポレオンの政治手腕に憧れて伝記を書く政治家、ナポレオンのミステリーを調べる歴史愛好家等々、彼らは皆、二百年の時を越えた「遺産相続人」である。彼の生涯そのものが

最大の遺産だという考えにも一理あるのではないだろうか。シャトブリアンの言葉「ナポレオンは、生きているときには、世界を獲得し損ねた。死んでから世界を手にした」というのは、文化面でこそ正鵠を射ている。[*11]

おわりに

今日のパリは、ナポレオンの記憶で溢れている。本人の像や彼自身の名を冠した通りはそれほど多くないが、アウステルリッツの勝利を記念して造られたエトワール凱旋門やカルーゼル凱旋門、ナポレオンの遺骸が安置されているアンヴァリッド、ナポレオンの像を掲げるヴァンドーム広場、十二の戦勝地の名が刻まれた「勝利の噴水」があるシャトレ広場、いたるところにNのマークが刻まれ「ナポレオン美術館」という名前だったルーヴル美術館、大陸軍（グランド・アルメ）の栄光を称えるべく設計されたマドレーヌ寺院など、いまなお世界中の人々を魅了するパリのシンボルである。リヴォリ大通り、イエナ大通り、フリートラント（フリードランド）大通り、ヴァグラム大通り、アイラウ（エロー）大通り、大陸軍（グランド・アルメ）大通り、ジュルダン大通り、クレベール大通り、ウルム（ユルム）通り、マレンゴ（マランゴ）通り、ドゼ通り、アウステルリッツ（オステルリッツ）駅、ピラミッド駅等々、これらはすべて戦場や軍隊、将軍の名前に由来する。ナポレオンの記憶に出会わずしてパリを歩くのは難しいとさえ言えるだろう。そもそも、ナポレオン一世の威光なくして皇帝ナポレオン三世は誕生し得なかっただろうから、もしナポレオン一世がいなければナポレオン三世が推進したパリ改造もなく、通りや駅の名前どころか、今日のパリの姿そのものが大きく異なっていたかもしれない。もちろん、これは歴史学の範疇を超えた単なる想像に過ぎない。

ナポレオンを一万字で語るのは難しい。その遺産ともなれば、もはや不可能と言えよう。本稿も決して網羅的なピックアップではない。ナポレオンをめぐる伝記は毎年何冊も刊行され続けており、彼が登場する創作物は山ほどある。ナポレオンの死から二百周年にあたる本年には、また多数の作品がこの山に堆く積まれることだろう。ナポレオンの遺産はまだまだ膨らんでいきそうだ。

注

＊1　Général de MONTHOLON, *Récit de captivité de l'Empereur Napoléon à Sainte-Hélène*, Paulin, Paris, 1847, t. 1, p. 401.

＊2　Patrice GUENIFFEY, *Bonaparte (1769-1802)*, Paris, Gallimard, coll. « nrf Biographie », 2013, p. 15.

＊3　François René de CHATEAUBRIAND, *Mémoires d'outre-tombe*, édition nouvelle établie d'après l'édition originale et les deux dernières copies du texte avec une introduction, des variantes, des notes, un appendice et des index par Maurice Levaillant et Georges Moulinier, t. 1, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1951, p. 924.

＊4　イベントリストについては、財団のホームページで確認できる。https://fondationnapoleon.org/en/2021-annee-napoleon-calendar-of-events/［2021年3月8日接続確認］

＊5　Richard WHATELY, *Historic Doubts Relative to Napoléon Bouonaparte*, London, printed for J. Hatchard, Piccadilly, 1819, p. 18.

＊6　Armand DAYOT, *Napoléon raconté par l'image, d'après les sculpteurs, les graveurs et les peintres*, Paris, Librairie Hachette et Cie, 1895, p. 24.

＊7　松嶌明男『図説 ナポレオン』河出書房新社〈ふくろうの本〉、2016年、9頁および166頁。

＊8　Lionel JOSPIN, *Le mal napoléonien*, Seuil, Paris, 2014.

＊9　Emmanuel de LAS CASES, *Mémorial de Sainte-Hélène*. Suivi de Napoléon dans l'exil par MM. d'Oméara et Antomarchi, et de l'historique de la translation des restes mortels de l'empereur Napoléon aux Invalides, t. 1, Paris, Ernest Bourdin, 1842, p. 767.

＊10　ティエリー・レンツ著、福井憲彦監修、遠藤ゆかり訳『ナポレオンの生涯――ヨーロッパをわが手に』創元社〈「知の再発見」双書〉、1999年、151頁。

＊11　CHATEAUBRIAND, *Op. cit.*, p. 1008.

楠田 悠貴（くすだ ゆうき）
一九九〇年、岡山県生まれ。慶應義塾大学文学部卒業、東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了。その後、同研究科博士課程に進学し、フランス社会科学高等研究院およびパリ第一大学パンテオン＝ソルボンヌ校への留学を経て、現在日本学術振興会特別研究員。専門は、フランス革命とナポレオン時代の歴史。主要業績に「ルイ十六世裁判再考――チャールズ一世裁判の解釈をめぐって」（松浦義弘／山崎耕一編『東アジアから見たフランス革命』風間書房、二〇二一年所収）、単訳書にマイク・ラポート著『ナポレオン戦争――十八世紀の危機から世界大戦へ』（白水社、二〇二〇年）がある。

15分で読む　ナポレオン没後二百年　ブックガイド

伝記的な著作、ナポレオン時代の概況書

出版社	ISBN（978）	書名	著者名	本体価格	刊行
河出書房新社	4309762364	図説 ナポレオン 政治と戦争——フランスの独裁者が描いた軌跡	松嶌明男	2000	2016
岩波書店〈岩波新書〉	4004317067	ナポレオン——最後の専制君主、最初の近代政治家	杉本淑彦	840	2018
山川出版社〈世界史リブレット人〉	4634350625	ナポレオン——英雄か独裁者か	上垣豊	800	2013
創元社〈「知の再発見」双書〉	4422211442	ナポレオンの生涯——ヨーロッパをわが手に	ティエリー・レンツ著、福井憲彦監修、遠藤ゆかり訳	1600	1999
白水社〈文庫クセジュ〉	4560058718	ナポレオンの生涯	ロジェ・デュフレス著、安達正勝訳	品切れ	2004
世界書院	4792721114	ナポレオン——革命と戦争	本池立	品切れ	1992
講談社〈講談社学術文庫〉	4061596597	ナポレオン——英雄の野望と苦悩（上）	エミール・ルートヴィヒ著、北澤真木訳	品切れ	2004
講談社〈講談社学術文庫〉	4061596603	ナポレオン——英雄の野望と苦悩（下）	エミール・ルートヴィヒ著、北澤真木訳	品切れ	2004
日本評論社	4535582736	ナポレオン年代記	J. P. ベルト著、瓜生洋一／新倉修／長谷川光一／松嶌明男／横山謙一訳	品切れ	2001

各分野の最新の書籍（帝国、戦争、経済、宗教、地方統治、法、社会・文化）

出版社	ISBN（978）	書名	著者名	本体価格	刊行
岩波書店	4000272018	ナポレオン帝国（ヨーロッパ史入門）	ジェフリー・エリス著、杉本淑彦／中山俊訳	品切れ	2008
白水社	4560097809	ナポレオン戦争——十八世紀の危機から世界大戦へ	マイク・ラポート著、楠田悠貴訳	2300	2020
多賀出版	4811574011	経済史上のフランス革命・ナポレオン	服部春彦	品切れ	2009
知泉書館	4862852113	文化財の併合——フランス革命とナポレオン	服部春彦	8000	2015
山川出版社〈山川歴史モノグラフ〉	4634673823	礼拝の自由とナポレオン	松嶌明男	5000	2010
刀水書房	4887084681	ナポレオン時代の国家と社会——辺境からのまなざし	藤原翔太	6900	2021

出版社	ISBN（978）	書名	著者名	本体価格	刊行
創文社	4423731093	コード・シヴィルの200年——法制史と民法からのまなざし	石井三記編	品切れ	2007
中央公論新社〈中公新書〉	4121024664	ナポレオン時代——英雄は何を遺したか	アリステア・ホーン著、大久保庸子訳	960	2017

ナポレオン伝説、ボナパルティスム

出版社	ISBN（978）	書名	著者名	本体価格	刊行
岩波書店	4000019866	フランスの近代とボナパルティズム	西川長夫	品切れ	1984
中央公論新社〈中公新書〉	4121025296	ナポレオン四代——二人のフランス皇帝と悲運の後継者たち	野村啓介	860	2019
山川出版社	4634490604	ナポレオン伝説とパリ——記憶史への挑戦	杉本淑彦	品切れ	2002
筑摩書房	4480051981	ナポレオン伝説の形成——フランス一九世紀美術のもう一つの顔	鈴木杜幾子	品切れ	1994

ナポレオンに関する史料翻訳

出版社	ISBN（978）	書名	著者名	本体価格	刊行
朝日新聞社	4022579119	ナポレオン自伝	アンドレ・マルロー編、小宮正弘訳	品切れ	2004
岩波書店〈岩波文庫〉	4003343517	ナポレオン言行録	オクターヴ・オブリ編、大塚幸男訳	品切れ	1983
潮出版社	4267017100	セント＝ヘレナ覚書	ラス・カーズ著、小宮正弘編訳	品切れ	2006
PHP研究所	4569709727	ナポレオン大いに語る	フリードリヒ・ジーブルク編、金森誠也訳	品切れ	2009

―書店現場から―

コロナ禍での書店イベント

森　暁子（ジュンク堂書店池袋本店　副店長）

ジュンク堂書店池袋本店では、２０２０年10月からコロナ禍ということでオンラインイベントを実施してきた。

当店は１９９７年の開店を経て２００１年に増築した際、９階にあった喫茶を４階に移動し、書店イベントを随時行っていた。開始当初はお客様が10名に満たないイベントもあったと聞くが、年が経つにつれて固定客も増え、内容や登壇者によって変動するものの、安定して40名の満席状態に近い人数のお客様にお越しいただけるようになっていた。当時、書店イベントはまだめずらしかったと思うが、海外では多くの実施事例が既にあり、最近では日本でも当たり前のものになったと思う。

20年かけて定着してきた当店のイベントも、コロナの流行で中止を余儀なくされ、先述の通りオンラインへと舵を切ることとなった。遠隔からもイベントに参加できるという構想自体は元々当社にあったもので、コロナの流行によって自宅から参加できるオンラインイベントの計画がより本格的に、スピード感をもって実行に移されることとなった。

オンラインイベントの実施はありがたいことに出版社や登壇者の協力を得て、当店では2020年10月こそ3回だったが、その後は月5〜7回ほど。2021年3月も今のところ6回程度となる見通しだ。先に元々構想があったと書いたが、その構想とは当店で行っていたオフラインイベント(オンラインイベントという言葉ができてから、以前行っていたイベント形式をオフラインイベント、と呼ぶようになった。ネット書店登場後に当店のような店をリアル書店と呼ぶようになった、というようなものか)を池袋に来られないお客様にも見てもらいたいというもので、大阪本店に設置したモニターにライブ配信をするというもの。2020年1月に試験運用され、目途が立てば他の店舗にも導入し、全国にある支店から池袋のイベントを見ることができるようになる。と考えていた矢先にコロナウィルスの流行。あいにく2020年3月以降オフラインイベントは実施できなくなった(余談だが私も企画運営に加わっていた「信田さよ子書店」という当店で行っている作家書店のトークイベントができなくなってしまったのは今でも悔やみに悔やみきれない)。そのため用意した機材や、社内公募によるスタッフもいったん留保となった。

緊急事態宣言解除後、人の移動ができるようになり、運営スタッフがそろったところでオンラインイベントの準備を始め、まずは丸善丸の内本店で2020年8月にスタートすることとなった。イベントはセミナー形式で、登壇者も参加者もすべてZoom、完全オンラインで行う。チケット販売のためのサイトや、その作成、宣伝等々、イベント運営の方法が確立されてきたころ、いよいよジュンク堂池袋本店でも、となり当時話題書担当をしていた私が同時にイベント関係も本格的に担当することになった(丸善丸の内本店とジュンク堂書店池袋本店、それぞれに担当者をつけ

ることで店舗の特性をそのままオンラインイベントの内容にも活かして行っている)。オンラインイベントを開始するにあたって、今後の実施の見通しが立たない中で、20年かけて積み重ねてきた書店イベントの雰囲気を絶やしたくなかったし、少しでもお客様にリアルに参加している気分になっていただきたいという強い気持ちもあり、できるだけオフラインイベントの時と同様に喫茶の場所で登壇者にお話ししていただき、その映像をＺｏｏｍに配信するというスタイルをとっている。もちろんイベントの種類、内容、用途によって完全オンラインで実施することもあるが、どちらにせよ書店に限らず様々なところで数多くのオンラインイベントが生まれている中で、書店独自のイベントであるという印象づけができればと考えている。

まだ始めて半年程度だが、今まで本当に多種多様なイベントを行ってきた。読書会スタイルのものから、一般的な対談形式のもの、当店担当者の趣味が高じて行った将棋イベントは、イベント最中に実際に対局を行いその様子を本物の棋士が大盤解説をしたり(写真)、実用書売場の将棋の棚の前で中継を行い、その後移動して喫茶で対談、イベント開始前に収録した対局を見ながら音声解説をする、というさながらテレビ番組の制作か、というものまで。さらに今後はイベント中に料理をするものまで控えている。

書店員のほとんどがアナログ一辺倒(もちろんそうではない方もいらっしゃるのは重々承知だが、私のまわりにいるスタッフは特に)の中、こういったことが実行に移せているのは、機材関連の知識を持った社内公募による専任スタッフたちのおかげだ。またイベント担当になって改めて、何か面

将棋のオンラインイベントの様子

白いことをやりたいという強い気持ちを持ったスタッフが多くいることに気づかされた。

イベント後にとるアンケート結果からいろいろと考えさせられることは多い。ネットワーク環境に関してはこちらが万全でも視聴側の環境が悪いとうまく見ていただけないことがある。どれだけ準備していても映像や音声のトラブルはつきものだし、オフラインイベントの時は登壇者もお客様もその場にいるということだけでなんとなく成立しているように感じられたイベントも、オンラインイベントでは数ある動画の一つとして見るだけになりがちなので(チャットでの質問投稿などはあるとしても)内容についてもシビアな目線で見られることが多い。

そもそもオフラインイベントの時は企画の段階から実施まで店側で主にやることはそれほど多くなかった。イベントの企画、開催の告知・

宣伝のベースを作ることと、当日場所を設営して登壇者とお客様を迎え入れ集金し、簡単な司会を行うくらいが主だった。お客様も登壇者に直接会ってお話を聞けることでまずは満足していただけることが多く、登壇者もお客様の雰囲気を見ながら偶発的に生まれるものの中から話の端緒をつかめるので場を作っていきやすいように感じた。登壇者とお客様の見えないコミュニケーションであのアットホームな雰囲気は生まれていたのだろう。

オンラインイベントは参加者の顔が見えないせいか、何をしていても緊張感がつきまとう。特にイベント開始前の数分の緊張感が強く、毎回少し胃が痛くなる。どれだけ準備していても、始まった瞬間になぜか映像が流れなかったり音声が出ていなかったり登壇者同士の話題が弾まないことがあったらとにかく速やかに対処しなければいけない。舞台裏を見せられないということは言い訳の余地がない。お客様にとっては見ている映像・音声だけがすべてで、コンテンツとしてイベントチケットを購入されている視聴側への対価はやはりコンテンツしかなく、それ以外で挽回しにくいのがオンラインイベント独特の緊張感が生じる理由だろうか。幸い、これまでのオンラインイベントでは、何かトラブルがあったとしてもお客様側の理解と寛容さに助けていただいている。が、いざとなった時の逃げ場がない感じはまだ慣れない。

また、オフラインイベントの場合は「場」を作っている感じがあるのに対し、オンラインイベントは「物」「コンテンツ」を作っている感じがあるのが大きな違いだろう。お客様からのアンケート結果に「内容の構成がよかった」というコメントがあるのがその証左かと思う。もちろんオフラインイベントでも構成は必要なのだが、オンラインイベントは構成がより際立って見える。そのあ

たりにお客様の満足度が関係していることもあり、イベント前の出版社とのやりとりはオフラインの時と比べてはるかに時間をかけて内容にもこちらから提案するなどより細かく慎重に行っている。

大変なことばかり書いてきたが、オンラインイベントにはオフラインイベントのそれを上回るくらいの良さももちろんある。その日その場所にいなくてもイベントを視聴することができることはその最大のものだろう(イベントは1週間のアーカイブ付き)。私自身もオンラインイベントに参加したことがあるが、家にいながら自由に飲み食いしつつ参加できるのは大きなメリットだ。それが地方在住であればなおのことだろう。参加者の割合は首都圏の人が一番多いが、地方在住の方の参加は数以上の価値を感じる。

課題ももちろんある。一番は告知方法だ。書店を利用されるお客様の中にはＺｏｏｍの使い方に慣れていない方も多いようで、告知方法が書店店頭とＳＮＳぐらいしかないため、ＳＮＳに縁遠い方にイベントの存在を知ってもらえる機会が少ない。それでもこれまでの期間で当店のオンラインイベント自体の認知が少しずつあがり、１回のイベント申込者数の平均値もあがってきた。今後はオンラインイベント自体の周知と、それぞれのイベントで出てくる個別の反省点をふまえ、より質の高いオンラインイベントを目指していく予定だ。一番大切なポイントである「書籍販売につながるオンラインイベント」を核に、企画や告知から、当日のイベントやその後のことまでトータルでオンラインイベントの設計が必要になっていくであろう。

森 暁子（もり さとこ）

図書館から広げる電子書籍

花田　一郎（大日本印刷株式会社）

私は7年前、いまはもう開催されていない東京国際ブックフェアのある会場内ブースにて、同じタイトルで講演させていただいたことがあります。電子書籍とひとくちに申し上げても色々なすがたがあり、タブレット端末が一般生活者の暮らしの中に取り入れられ始めた頃から既に10年以上が過ぎました。こうした情報環境の変化の時間の中で、私は仕事として「電子図書館」と呼ばれる事業に携わってきました。

ひとことにまとめれば、図書館、特に公共図書館が取り組めるような電子書籍のサービスを目指し、活動してきた10年でもあります。本稿ではそうした私自身の体験を通じて感じてきた様々なことを手掛かりに、図書館における電子書籍が置かれている現状を報告したいと思います。そして「図書館から広げる電子書籍」について、7年の年月を経て改めて、お示ししたいと考えています。

電子図書館とはどのようなものか

はじめに、そもそも「電子図書館」とはどのようなものか、ご説明したいと思います。歴史的にも色々に言われてきた枯れた言葉ではありますが、ここでは私たちのような事業者がサービスとして提供する電子図書館に限定してご説明したいと思います。

なお、これからご紹介する電子図書館サービスについて、以降特段の断りが無い場合、私自身の所属するＤＮＰ及びグループ企業である株式会社図書館流通セ

図1　電子図書館Webサイトの例

ンター（以下、TRCと表記）が共同で事業を推進している電子図書館サービス「LibrariE & TRC-DL」[*1]を指すとご理解ください。

基本的に我々のような事業者が取り組む電子図書館サービスは、インターネット上に環境を構築し、Webサービスとして提供されます。全国の個々の図書館（公共図書館や学校図書館）はこうしたWebサービスの顧客となり、事業者と契約することでそれぞれの図書館毎に電子図書館Webサイトが提供されます。

図書館は紙の資料と同様、必要に応じた電子書籍を購入して蔵書（ラインナップ）を構成し、それぞれの電子図書館Webサイトから電子書籍が配信されます（図1）。ここへ図書館利用者自身が利用するPCやタブレット、スマートフォン等からアクセスし、所定の手続きを踏むことで、いつでも電子書籍を利用することが可能となります。

電子図書館で本を読むための電子書籍ビューワは、専用アプリケーションを避け、インターネットを利用するのと同じブラウザ上で動作するものを採用しています。このため利用者はインストールや設定等の煩雑な手間を

かけずに本を読むことができ、普段利用しているデバイス（端末）がそのまま利用可能です。

しかし、電子図書館にアクセスした人が誰でも好きなだけ本が読めてしまうことは、本を買って欲しい出版社や著者にとって問題です。そこで、正当な利用者の確認としてＩＤとパスワードを入力させて認証を求め、ＩＤを入手するためには事前に本人確認等を経た利用者登録が行われます。また図書館が購入する電子書籍はライセンス情報（閲覧・貸出条件）が設定されていて、同時利用者数や有効期限等が管理されます。

つまり利用者はまず認証を経て、次に読みたい電子書籍を見つけ、ライセンス情報に基づいて「貸出」等が行われ、最終的に本を読むことができるようになります。電子図書館は読みたい本を見つけるための検索機能や、「貸出」同様に「返却」・「予約」や「延長」といった基本的な機能を実装しており、紙の資料を利用するのと近しい感覚で電子書籍を利用することが可能なのです。

なぜ電子図書館なのか

では、どうして電子図書館の取り組みが始まったのでしょうか。そこには紙の資料とは異なる電子書籍ならではの事情がありました。本誌の読者には釈迦に説法かもしれませんが、細かく見ていくと違った角度からの発見があるかもしれません。

まず従来の紙の資料を前提とした図書館について考えてみましょう。図書館は利用者へ貸出を行うために本を購入しています。この貸出という行為ですが、これは著作権法に規定された権利制限によってその活動が許されています。もともと著作権法で保護される著作権者の権利として貸与権があります（著作権法第二十六条の三）。これを制限するのが同法第三十八条に記載された権利制限規定であり、そこには「営利を目的とせず」「料金を受けない」ことが条件とされています。一方で、図書館の活動を定めた図書館法では、その第十七条にいわゆる「無料原則」が示されます。これらを解釈すれば、図書館が自由に本を貸出できる根拠となるわけです。

次に電子書籍について考えてみましょう。そもそも一般的な電子書籍はインターネットを経由して配信（販売）されますが、これは著作権法上の公衆送信権に当たり（同法第二十三条）、権利制限規定が存在しません。そのため電子書籍一般には著者との契約書も含めた十分な権利処理が必要と言えます。つまり電子書籍の配信には明示的な権利処理が必要とされ、その過程で販売や配信の条件設定のひとつとして、電子図書館で貸出を行うことができるか決められるわけです。

このことは本の流通という視点で考えてみても、紙の資料であればどのような書店から購入しても図書館資料として同じように扱うことができますが、電子書籍に関しては電子書籍書店の利用規約の範囲に制限されることになります。多くの電子書籍書店は原則個人向けを前提に利用規約が定められており、たとえば職員が経費で電子書籍を購入したとしても、その電子書籍（及びそれが読める端末）を図書館が貸出することは、原則できないということになります。

そうなると図書館は電子書籍を取り扱うことが将来にわたって難しくなります。そこで改めて、貸出も想定した図書館向けの配信の仕組みが求められ、それに合致する権利処理というのが行われるようになりました。これは、もともと図書館に本を販売していたＴＲＣなどが電子書籍の潮流を受けていちはやく制度的な検討を重ね、顧客である図書館とも対話しながらたどりついたひとつの結果でもありました。

しかしこうした取り組みの一方で、電子図書館は、広く出版流通業界内であまり肯定的な見方がなされてきたとは言い難くもありました。まず出版社からは、そもそもの電子書籍化の壁（明示的な権利処理の必要性や迫られるビジネスモデルの転換など）と図書館配信の壁（貸出が販売を損ねないか）の二重の壁があるというようなことが言われました。紙の本の風合いこそが図書館のような知育の場に適しているのだと仰られた著者の方もいらっしゃいました。また図書館からも、あえて電子書籍に取り組まずともよいのではないかという意見がなされ、その背後には新たな予算獲得の必要性やこうしたサービスを管理・運営するための人材といった、様々なリソースへの不安が見え隠れしていました。そしてそのいずれも間違いではなく、いま出版流通の現場が置かれているひとつの側面

が如実に示されているとも受け取れました。

では、電子図書館のようなサービスは無くても良かったのでしょうか。実際の事業者としては明言しづらいこうした問いに対しては、世の中の変化がその解のヒントをくれるように思います。

電子書籍のいま

さて、２０２０年の出版市場を見てみましょう。公益社団法人全国出版協会・出版科学研究所の調査[*2]によると、紙と電子の出版を合算した出版市場規模は対前年４・８％増の１兆６１６８億円となっており、２年連続でプラス成長となりました。紙と電子の内訳を見ていくと、紙はマイナスが小さく留まり（１％減）、電子の伸長が続いています（28％増）。このことから全体の電子占有率が２割を超えましたが、その多くは電子コミックとなっています。１９９６年の２兆６５６４億円をピークに長く減少傾向にあった出版市場は、電子書籍を組み合わせていくことで下げ止まりを見せ、かつ新市場の登場へと向かい始めています。

その牽引役となったコミックですが、ちょうど原稿執筆時に発表された前掲出版科学研究所の調査結果をレポートした特定非営利活動法人HON.jpによる記事が公開[*3]されました。これらを見ていくと、明示的に電子コミックの統計が示された２０１４年以降、電子コミック市場は拡大傾向であり、２０２０年は３４２０億円にまで大きく伸長しています。これはコミック市場全体も引き上げ、１９７８年の統計開始以降で最大市場規模を記録しており、出版市場全体への影響としては、書籍は横ばい、雑誌が落ち込む中で、コミックの成長拡大がプラス成長を実現していると言えます。

この背景には確かにコロナ禍による巣ごもり需要なども影響があったと言えます。しかしそもそもの流れとして電子化は市場構成を大きく変え、一般生活者へ定着してきました。そのため電子出版への取り組みは後退することなく広がりを見せています。そしてそのとき、電子書籍は直接売上に貢献するものが優先される、という現実も見えてきます。

もともと出版というのはそこで生まれる本の多様性が魅力であり、本の多様性が図書館の意義にも深く結びつ

いてきました。この特長を電子書籍時代にどうつないでいくかということが実は、電子図書館の存在意義にも結びついていくと考えています。

さて、では電子図書館はいまどのような状況にあるでしょうか。

ちょうどこの1年を振り返ると、コロナ禍を受けて休館を余儀なくされた図書館がそのサービスを継続できないという問題が生じ、改めて電子図書館に注目が集まりました。そもそも電子図書館は紙の資料の置き換えではなく、従来の図書館サービスに加えていくことで図書館サービス全体の裾野を広げる役割が期待できます。そのため、オンラインで提供される電子図書館は、今回のコロナ禍のような物理的な活動が制約されてしまうような場合に有効性を発揮し、図書館のサービス継続に役立てることが可能です。

実際に利用実績を評価してみると、2020年の緊急事態宣言時にはその利用が前年同時期の4～5倍以上に著しく増加しました。[*4] そして解除後は徐々に開館再開となったのち、恒常的な利用がそれ以前との比較で約3倍程度に増えた状態で落ち着いています。

これは、そもそも図書館サービスとしての電子図書館の認知が足りていなかったところに急な注目が重なった結果とも考えられますが、一方で生活者が知ることによりしっかりと使われるサービスでもあるという事実が再確認されたように思います。

電子書籍が一般に定着していくのと同じように図書館における電子書籍もその存在が広く知られつつあります。そのとき、市場性としての電子書籍ではない、図書館という生活者接点から期待される電子書籍というものが浮かび上がってきます。具体的にそれは、本来の出版が届け続けてきた、本の多様性を提供するという側面です。

電子図書館というショーケース

一般社団法人電子出版制作・流通協議会の調査[*5]によると、2021年1月1日時点で全国の143自治体が電子図書館サービスを稼働させています(図2)。昨年のコロナ禍の影響から地方創生臨時交付金が創設されたこともあり、一気に導入が増加し、その勢いは継続しています。全国の図書館設置自治体数に対してはまだ1割を

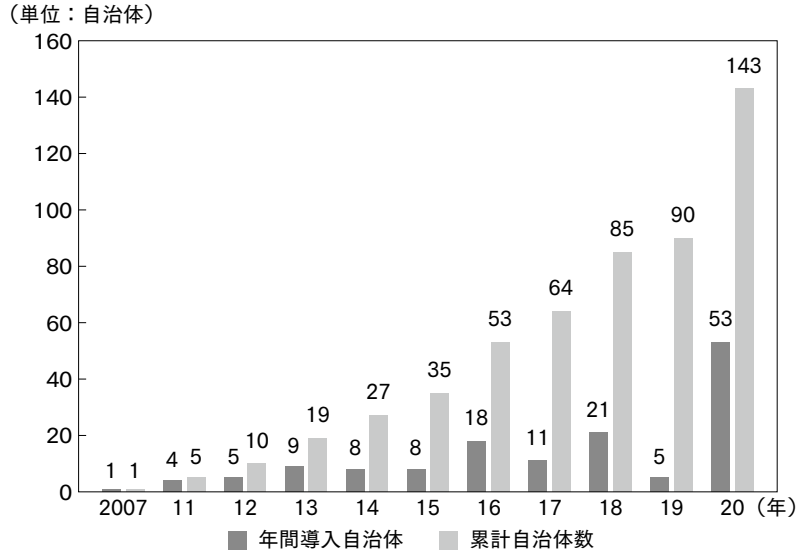

図2　公共図書館電子図書館導入数の推移

超えたところですが、図書館におけるオンライン型サービスへの期待の高まりはますます増大しています。また公共図書館以外、特に学校図書館等にも導入が進み、サービスの普及拡大が続いています。

このように全国の図書館で電子書籍の導入が進むことで、従来の購入を中心とした電子書籍利用者以外の、図書館利用者としての読者の数が増えています。電子図書館を導入する自治体が増えることでそこの利用者が読者となり、そうした人たちが実際に電子書籍を読むことで利用実績が増大するという循環が生まれています。

このことは、コミックなど売れるものが優先されがちだった電子書籍の流れに、改めて本の多様性を思い出す機会ともなっています。というのも、はじめに紹介した通り電子図書館は図書館毎のWebサイトを持ち、どういった本を並べるか図書館が主体的に決めていくことができます。電子書籍書店では売れるもの・売りたいものから順番に並べられるのに対し、電子図書館ではそれぞれの図書館が何をアピールしたいかによって異なったラインナップが並べられることになります。実際に電子図書館サービスには複数の本を特集としてまとめて紹介で

きるような機能やお知らせを掲出できる機能を持っており、こうした機能を活用しながら、本の多様性に沿った、様々な本との出会いが演出できるわけです。

電子書籍に限らず、しばしば書店と図書館はフローとストックという言葉で比較されます。つまり本を商品としてたくさん販売するためにフローのメディアとして機能する書店と、本の多様性を訴求できるストックのメディアとして機能する図書館という比較です。これは紙や電子であることにかかわらず、本をどのように扱うかという役割に応じた違いです。そして電子図書館が増えることは、そのストックのメディアが増えることと同義であり、本の多様性を示し、様々な本との出会いを演出する場が増えることにつながります。

このようにして電子図書館が「ショーケース」として本の多様性を示し、出会いの演出を担っていくことが期待できます。まさにこのことは、「図書館から広げる電子書籍」を実現するひとつのすがたではないでしょうか。

未来の読者を育てる

ショーケースとなった電子図書館が本の多様性を示せるのだとしたら、図書館にとってもその場は自らの情報発信に有効であると言えます。つまり、その図書館が考える本のつながりや、本を紹介する切り口を表現できるわけです。そうなると図書館は、従来の出版社が刊行する本だけでなく、地域の資料や、図書館や自治体が自ら発行するような独自資料のようなものもそのショーケースに同じように並べることで、ますます情報への入口を多様に示すことができるようになります。そして、資料の電子化はそれを非常に容易にさせます。

実際にいままでもそうした地域の資料と一般の出版物とを組み合わせて紹介することは行われてきたわけですが、現物に依存する場合、一定の利用に制限されてしまいます。しかし電子図書館のように、場所も時間も自由な利用が可能な場合、その活用の幅はとても広がります。図書館独自の資料が電子化されて電子図書館サービスを通じて提供されることは、情報へのアクセスを簡便にす

るというメリットもあるのです。

そしてこれは図書館がもともと有してきた読書環境の提供だけではない、知的好奇心の充足、つまり広い意味での学びを支えるような役割の実現にもつながります。図書館を利用して知的好奇心を満足させる情報にたどりついた利用者が、さらに次の興味・関心をつかむこと自体が学びであり、図書館はそうした利用者の行為に応えながら地域毎の個性や独自性を深めていくことができます。インドの図書館学者ランガナタンの言葉を借りればまさに「図書館は成長する有機体である」ということなのだろうと思います。

地域の情報拠点としての図書館がストックのメディアとしてしっかりと機能し、かつ電子書籍や資料の電子化を有効活用することで利便性を与えながら利用者とコミュニケーションしていくことは、まさしく利用者の学びを支えるだろうと思います。そしてそのような体験を得た人たちが、より良い未来の読者に育っていくのだろうと想像します。

おわりに

改めて今回、いまだからこそ図書館から広げることができる電子書籍というものを考えてみました。そうしてみて、やはり個々人が購入できる電子書籍に加えて、図書館のような存在を経由することで試しに気軽にでも読んでみられるような電子書籍があることは望ましいのだろうと思います。本の多様性を知り、より良い読者に成長していける場があることは重要だろうと考えています。だからこそ新しい取り組みゆえ困難もありながら、電子図書館サービスへ取り組む必要性について再確認できたような気がしています。

電子図書館サービスはここに示した以外にも様々な工夫を積み重ねてきており、アクセシビリティや多文化共生、書誌情報や統計情報の充実といった図書館ならではの視点が多数ありますが、紙幅に限りもあって全部をご紹介できないことをお許しください。

オーストリアの哲学者イヴァン・イリイチはその著書『コンヴィヴィアリティのための道具』(邦訳、ちくま学

芸文庫）で、「図書館は自立共生的（コンヴィヴィアル）な道具」であると述べました。私なりの解釈として、道具に使われるのではなく、道具を自由に自立的に使おう、というふうに受け取っていますが、電子図書館もまさにそういった「道具」と言え、それぞれの立場から自立的に使うことがひいてはその道具そのものも良くしていけるのだと思います。そしてそうしたことのひとつが、「図書館から広げる電子書籍」というアプローチにつながれば良いと考えています。

注

＊1　https://www.trc.co.jp/solution/trcdl.html
＊2　https://www.ajpea.or.jp/book/2-2101/index.html
＊3　https://hon.jp/news/1.0/0/30684
＊4　https://www.trc.co.jp/information/pdf/20200616_TRC_release.pdf
＊5　https://aebs.or.jp/pdf/E-library_introduction_press_release20210101.pdf

『近代日本宗教史』と宗教学

水野　柊平（春秋社　編集部）

宗教学というもの

私は大学で宗教学コースに属していた。宗教学コースという名前でありながら、宗教学に関する授業は二つぐらいしかなく、あとはキリスト教や仏教などの宗教に関する思想を扱う授業だった。宗教学コースと言うからには宗教学をやると思うだろう。だが、そもそも宗教学をやるとは何をすることなのだろうか。前述した宗教学に関する二つの授業の一つはそうした疑問について考えるものだった。だから宗教学に関する授業とみなせる。もう一つは宗教という概念そのものについて考える宗教哲学の授業だった。こちらは履修しなかったのでよく分からない。宗教哲学という名前の授業だったので、純粋な宗教学の授業は一つだったと言えるかもしれない。

宗教学というもののよく分からなさはそもそも宗教という対象の分からなさとそれを研究する方法の分からなさの二つから成っているように思える。この二つについて書いてみるついでに私が編集として関わっているシリーズ『近代日本宗教史』に触れていこう。

宗教という対象

対象の分からなさというのはそもそも何が宗教なのかよく分からないということである。宗教を挙げてみろと言われれば、誰でもキリスト教やら仏教やらイスラム教

やらと挙げていけると思うが、これらはなぜ宗教とひとくくりにできるのだろうか。神を信仰することが宗教の本質だろうか。だが、仏教は神のいない宗教だと言われたりする。神道には神がいるが、神道は宗教だろうか。

神道と宗教の関係は『近代日本宗教史』中で何度も取り上げられる重要なトピックだ。日本人は無宗教を自称する人が多い。そんな中でも神社に詣でたことのない人は少ないだろう。神社にお参りしたことがあるだけで、神道の信徒だと言えるとは思えないし、そもそも神道の教義やらを信じてお参りしているわけではないから無宗教ですという言い分が考えられる。教義を信じることが、宗教の条件かどうかは置いておいて、この神道は宗教ではないという感覚は近代日本宗教史の文脈を非常によく感じる例である。

明治政府は欧米の文明国との交流の中で宗教という概念が重要らしいと気づいた。文明国であるからには信教の自由と政教分離が求められたからである。そして欧米諸国の根底にはプロテスタンティズムが息づいていたからでもある。日本でも信教の自由を認めなければならないが、キリスト教に拡大されては困る。王政復古の大号令で神武創業の始めに基づくことが宣言され、天皇中心の国づくりが目指されていたからである。天皇の絶対性がキリスト教によって脅かされるわけにはいかなかった。神道には欧米諸国にとってのプロテスタンティズムと同じような役割と、キリスト教に対抗する役割が期待されたのである。

そうして大教宣布の詔のもと、惟神（かんながら）の大道を宣教師・教導職を通して国民に教化しようとしたが、神道教導職内でも神道神学がまとまっておらず、教化に対する仏教との方針の相異等もあり、失敗した。その結果、教導職は廃止され、神道で国民を教化するという方向は断念された。神道が宗教ではないという感覚の理由の一つに、神道には教典やはっきりした教えが無いように思えることがあるわけだが、それはこうした経緯があるのだ。

そして、こうしたはっきりした教えが無いことが日本における政教分離に大きな役割を果たした。神道は教えではないわけだから、宗教ではなく、神道的な祭祀が政治の中心にあったとしても政教は分離されているということになるわけである。これが日本型政教分離である。つまり、現在の、神道は宗教ではないという感覚は戦前

シリーズ『近代日本宗教史』全6巻（春秋社）
最終第6巻『模索する現代』7月刊行予定

の日本型政教分離に淵源しているのである。これが近代日本宗教史の文脈である。この話は『近代日本宗教史第1巻　維新の衝撃――幕末〜明治前期』で扱われている。

国家の中心になるためには神道は教えでないことが必要であったわけだが、政治的な文脈を離れれば神道は教えとなって内容を持つことができた。そうした神道は教派神道と呼ばれ、公認された流派が十三派あった。つまり、神道は元来宗教性を持っていないわけではなく、意図すれば、宗教性を持つこともできるのである。

この宗教性という用法も宗教は教えでなければならないという発想に基づくわけだが、それは日本型政教分離に利用された発想であって、何が宗教であるのかは難しい問題であり、考え続けなければならない問題でもあるのだ。だから、じゃあ神道は宗教なのかと言われても、そもそも宗教が何なのか分からないのだから、はっきりしたことは言えないのである。

しかし、さまざまな場面で宗教とされるものを扱うことは、明治政府が政教分離と信教の自由を要請されたように、求められているのであり、分からないなりにそれ

は扱われてきたのである。だから、その扱われ方を研究することで宗教とされるものへの向き合い方を考えることができる。

日本型政教分離について前述したが、それは政府の宗教管理体制にも反映されていて、一九〇〇年に内務省社寺局が神社局と宗教局に分けられたのを皮切りに、一九一三年には宗教局が文部省へ移され、内務省に留まった神社局は一九四〇年に神祇院に格上げされた。神社とその他の宗教に分けられて、神社は特別扱いを受けていたのである。現在は文化庁文化部宗務課に一本化されているが、神社本庁の存在など神道の問題は未だに燻っている。少し前だが地鎮祭や玉串料に公金が使われて政教分離の観点から問題があるのではないかとされたこともあった。これも何が宗教かという判断とその扱いの難しさを示している。宗教というものの本質に合わせてそれを扱うというよりも、宗教をどう扱うかがその在り方を決めているとも思える。ならば、なおさら宗教の扱われ方に注目することは重要である。

宗教学という手法

宗教学の分からなさのもう一方、研究の方法の分からなさについて書いてみる。宗教学それ自体というものはほとんどなく、たとえば宗教思想を研究するなら文学やら哲学やら神学やら仏教学になる。宗教と社会の繋がりを研究するなら宗教社会学になるし、歴史を扱えば宗教史学となるだろう。すでにある他の学問が宗教と関係することで広義の宗教学となる。一方、狭義の宗教学というのは本当に限られたものなのである。宗教とは何かという宗教それ自体を扱うとしても、それは宗教に関する哲学や宗教哲学と呼ばれかねず、狭義の宗教学ではないかもしれない。つまり、そもそも狭義の宗教学など存在しないのかもしれない。

『近代日本宗教史』での宗教への迫り方は多様だ。政策や法律などから政治的に迫るもの、当時出版されていた雑誌やラジオ、テレビや映画などメディアを読み解くもの、アンケート調査のデータを読み解くもの、宗教家のテキストから思想を読み解くもの。宗教に迫る方法の

多様さはそれだけ宗教が影響しているものの多様さを示していると言える。総勢九十名近くにのぼる執筆者は取り上げるトピックもさまざまなら、その手法もさまざまで魅力的だ。

まとめ

以上、宗教学というもののよく分からなさとシリーズ『近代日本宗教史』を少し絡めて書いてみた。宗教学にこのような特徴があるということは『近代日本宗教史』は近代日本の宗教に関する内容であればなんでもありということだ。それどころか『近代日本宗教史第3巻　教養と生命――大正期』では宗教か非宗教か曖昧な「宗教的なもの」が扱われる。それは大正期に流行した霊能や身体技法のことである。こうした懐の深さが宗教学の面白さであり、それすなわち『近代日本宗教史』の面白さなのである。

シリーズ『日本宗教史』と人文学

石津 輝真（吉川弘文館 編集部）

本稿を記す数日前、最終回配本の見本が届いた。無事に完結をむかえ、こうした企画に関心を寄せていただいている読者の方々、シリーズの骨組みを作ってくださった企画編集委員の先生方、充実した研究成果を余すことなく示していただいた執筆の先生方に御礼を申し上げつつ、簡単にシリーズの紹介をすることにしたい。

❖

われわれ現代の日本人は無宗教ともいわれる一方、数々の宗教的行事とも共存している。私自身、信心の有無を問われれば、どちらかといえば否定的な答えになると思う。しかし、身の回りには、宗教的な物事や行事は数多くとけこんでおり、特に強く意識することなく共にある。

歴史をふりかえると、仏教・神道・キリスト教などの諸宗教は国家・政治とかかわり、社会・文化に根ざしていた実態が数多見出される。宗教なしでは日本の歴史は語り得ないことは明白だろう。

また、現在、日本の宗教や文化が、世界のなかでも特殊で優れているといった言説は、テレビ、ネットなどメディアから多々流布されている。世界をみても、ナショナリズムの高揚が各地で摩擦を引き起こし、他者への理解を阻んでいる。はたして宗教は特定の国・社会のなかで内在的に発展していくものなのだろうか。古今東西、人びとははるかな道のりを旅し、海を渡って交流を展開してきた。こうした交流が宗教・思想を運び、それぞれ

の地で融合することであらたな文化が醸成されてきたのではないか。

日本社会のなかで宗教を考えることの重要性は今までも論じられてはきたが、これまでの宗教史研究はそれぞれの教派・教団・宗派を対象として個別にすすめがちで、総合的な日本宗教史像を構築する機運になりにくかったように思われる。ただ、近年は豊かな研究成果が数多く蓄積され、大きな枠組みで宗教史を構想する土壌ができつつあったと考えられる。こうした情勢に鑑み、本シリーズは日本宗教史の視座から日本の社会と文化、さらには世界のなかの日本の位置をあらためて考えようとして企画された。

❖

本シリーズはいくつかのポイントをおいて編成された。まず、古代から近現代という長い時間軸を設定し、そのなかで宗教がそれぞれの時代においていかなる特質をもっていたのか、また変遷あるいは継続していく様相を探ることとした。

つぎにあげられるのは、世界の歴史・文化のなかで日本宗教がどのように位置づけられるのかということである。キリスト教・イスラーム教・儒教のような世界的宗教との比較や、文化交流史の視座から日本の宗教文化の醸成された背景を、広い視点から見直した。

大きな宗教の動きも大事だが、実際に列島社会に生きた人びとの信仰はいかなるものだったのかも見落とせない観点である。それぞれの時代で、人びとがいかにして死に向き合い、何を信じたのか、奥深い信仰世界に分け入る。

では、そもそも「宗教史」はいかにして形作られ、現代にあるのか。近代以降の研究の流れを検証し、現在も重きをおかれる学説が成立した背景を追究した。近代国家の展開と宗教史のかかわりをおさえて、今後の日本宗教史の行く末を探った。

以上のようなポイントがあるが、宗教を基軸に日本の歴史・文化の実像を明らかにするという試みは全巻通底している。さらには、こうした試みを通してあたらしい人文学のあり方を構想した。

❖

本シリーズは、伊藤聡・上島享・佐藤文子・吉田一彦の四名の先生が企画編集委員となり、先にあげた意識のもとで、巻構成、テーマおよび執筆者の選定にあたった。何度も編集会議を行い、すぐれた力量をもつ多くの研究者の協力をいただくことができた。編成は以下の通りで、それぞれの巻に十本ほどの論考を収めている。具体的に紹介してみたい。

シリーズ『日本宗教史』全6巻（吉川弘文館）

第1巻　吉田一彦・上島享編
『日本宗教史を問い直す』

第2巻　上島享・吉田一彦編
『世界のなかの日本宗教』

第3巻　伊藤聡・吉田一彦編
『宗教の融合と分離・衝突』

第4巻　佐藤文子・上島享編
『宗教の受容と交流』

第5巻　伊藤聡・佐藤文子編
『日本宗教の信仰世界』

第6巻　佐藤文子・吉田一彦編
『日本宗教史研究の軌跡』

第1巻は通史的な論考と、さまざまな分野からみた日本宗教史研究の論考を配置したシリーズの総説に相当する巻である。通史的な論述をおくことで、古代から近現代の歴史的展開を縦軸として把握することを意図したものである。第2～6巻において、無数に張りめぐらされた各テーマの横軸と組み合わせることで、総合的に日本宗教の実像、そして多様性を捉えることをめざしている。また、国際交流史・美術史・文学・建築史・民俗学・文

学のそれぞれの立場から、宗教史への視座を論じていただいた。

つづく第2巻では世界のなかでの日本宗教の位置づけを問う構成となる。日本宗教と世界の関係にくわえ、日本もその一員であるアジア世界の宗教・文化・思想とのかかわり合いを特に掘り下げた。

宗教というものはそれぞれが独立し棲み分けているというものではなく、多様な宗教が融合し、あるいは離れ、ぶつかり合うこともあった。第3巻では古代から近現代までの宗教間の融合とそれにともなう葛藤に焦点を絞る。神仏習合や排仏論など具体的な事例から見出される知見は、重層的な日本宗教の実態をよく示している。

飛鳥時代、日本に仏教が伝来したことはよく知られているが、伝来は一度きりではなく各時代を通して波状的にさまざまな思想が流入した。こうしてもたらされた宗教と思想がいかに列島社会において受け入れられ、定着していったのかを第4巻で取り上げた。仏教・儒教・キリスト教や道教など、各時代においてじつにさまざまな宗教が日本社会の歴史のなかで積み重ねられてきたのである。こうした事実のもとに今の日本社会があり、歴史のなかで宗教をみていく必要性はここにも見出される。

では、市井の人びとは宗教に何を求め、信じたのか。第5巻では、人びとの実際の信仰を基軸としてみていく。現世における営みのなかでの信仰の実態とその主体、また死者と冥界に対していかなる思想があったのかなどを論じていただいた。誰もが迎える死をいかに考えるか、本巻から学べることは多いと思う。

近代日本の成立は、さまざまな学問を創出し、展開させていった。第6巻では人文学のなかで宗教史をめぐる学問がいかに成立し展開していったのか、その歩みを明らかにしている。こうした検証があってこそ、人文学の再構築を図ることができるとの意図であった。

みてきたように日本宗教史は人文学各分野をつなぎ、総合化する可能性を秘めている。それは、現代の社会に対しても少なくない意義をもつと思うし、人文知が社会のなかで有意義に活用されていくことを願う。本シリーズはそのための試金石でもある。

❖

内容の紹介に終始してしまった。幅広い分野からの人

選については述べたが、執筆者の方々のことについてふれておきたい。この企画を進行していくなかで、私が企画編集委員に依頼したことの一つは若手を登用してほしいという点だった。執筆いただいた方々は大家・ベテランと呼ばれるような方や、中堅のすぐれた研究者が多い。当初は、ほとんどこういった方々で占められる可能性もあり、それは意味あることだが、今後、この分野において議論を引き継ぎ、活発化させるには、やはり比較的若い方に意欲的な論考を寄せていただく必要があると考えた。受け入れてくださった企画編集委員の先生方には感謝したいし、また、決して恵まれた研究環境ではないなかでも、力を入れて執筆していただいた若手の研究者にも御礼を申し上げたい。本シリーズへの執筆が、いっそうの飛躍になればと願う。

また、本来、執筆していただく予定をしていたが、冥界に旅立たれた方々がいらっしゃったのが、じつに残念であった。お元気にご執筆いただければ、より厚みのある内容をお届けできたように思う。

❖

本シリーズの刊行を開始したのは二〇二〇年七月であった。コロナウイルスの渦中であり、誰もが不安をかかえた日々であったころだった。そんななか、製作を進めていたのであるが、執筆の方々の協力、そして受け入れてくださる数々の書店もあって世にお送りすることができた。本当にありがたいことであった。

人文書は社会がかかえる問題の特効薬やワクチンではないのかもしれないが、遅効性のある薬もあるように、本シリーズも静かに薬効となれば幸いに思う。

本号では、「日本の宗教史」をテーマにした、二つの会員社のシリーズを紹介していただきました。ときに「無宗教」と言われる日本人の宗教観を考える上でも、ぜひそれぞれのシリーズの書籍を手に取ってみていただければ幸いです。（編集部）

人文会会員名簿

〒113-0033　文京区本郷2-20-7　みすず書房内

2021年4月現在

社名	担当者	〒	住所	電話	FAX
大月書店	佐藤　信治	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石　修	113-0033	文京区本郷5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀伊國屋書店	段塚　省吾	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子　智	108-0073	港区三田2-17-31	3451-6926	3451-3124
勁草書房	西野　浩文	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春秋社	吉岡　聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶文社	片桐　幹夫	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠信書房	郡司　恵太	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
青土社	森　卓巳	101-0064	千代田区神田猿楽町2-1-1 浅田ビル1F	3294-7829	3294-8035
創元社	水口　大介	101-0051	千代田区神田神保町1-2 田辺ビル	6811-0662	3219-7800
筑摩書房	廣井　一茂	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	澤畑　塁	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日本評論社（休会中）		170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白水社	岩野　忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社	登尾　純一	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	三木　拓	102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	5214-5540	5214-5542
みすず書房	田崎　洋幸	113-0033	文京区本郷2-20-7	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	本橋　弘行	101-0062	千代田区神田駿河台3-6-1 菱和ビルディング2F	3525-8460	3525-8461
吉川弘文館	片山　伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事　田崎洋幸
会計幹事　平石　修
書記幹事　片桐幹夫

《◎委員長（幹事）　○副委員長》

販売・企画委員会　◎水口大介　○森　卓巳・佐藤信治・段塚省吾・郡司恵太・登尾純一
調査・研修委員会　◎片山伸治　○西野浩文・廣井一茂・澤畑　塁
広報委員会　◎岩野忠昭　○乙子　智・吉岡　聡・三木　拓・本橋弘行

人文会ホームページ　http://www.jinbunkai.com/

（各種情報／各社へのリンクはこちらからどうぞ）

「高校生のためのブックガイド」のご案内

人文会では会員各社の刊行物の中から、高校生に読んでもらいたい書籍を2点ずつ厳選し、「高校生のためのブックガイド」として1枚のリーフレットにまとめました。書店外商部様や書店店頭でのフェアなどで活用いただいております。

目録のご案内

人文図書3分野の基本図書および最新刊を網羅した年度版の図書目録です。

●人文図書目録刊行会発行　A5判・平均200頁　頒価本体（各）286円

◆哲学・思想図書総目録2021－2022年版

1446点（106社）収載

特別寄稿：重田園江「ポストモダンの後、それから……」

〔掲載分野〕哲学・思想一般／倫理学・人生論／美学／日本の哲学・思想／アジアの哲学・思想／中近東・中南米・アフリカの哲学・思想／西洋哲学・思想／現代哲学・思想／宗教一般／宗教学／その他の宗教／哲学・思想関連雑誌

ISBN978-4-915268-49-6

◆心理図書総目録2021－2022年版

2352点（95社）収載

〔掲載分野〕心理総論／基礎心理／発達心理／教育心理／臨床心理／精神分析／精神医学／社会心理／その他の心理／心理関連雑誌

ISBN978-4-915268-50-2

◆社会図書総目録2021－2022年版

2183点（123社）収載

〔掲載分野〕社会一般／社会学理論／家族社会／地域社会／産業労働／福祉・教育／社会心理・マスコミ／社会問題／文化文明論／文化人類学／民俗学／神話・民話／社会関連雑誌

ISBN978-4-915268-51-9

＊ご注文は書店にお願いいたします。

●人文会　〒113-0033　東京都文京区本郷2-20-7（みすず書房内）

●人文図書目録刊行会　〒162-8710　東京都新宿区東五軒町6-24（トーハンビル内）

TEL　03-3266-9521（事務局）

創元社

妖しくも美しい、西洋美術の「闇」の側面が浮かび上がる

【アルケミスト双書】

闇の西洋絵画史

第1期〈黒の闇〉篇

山田五郎［著］

〈1〉**悪魔** 〈2〉**魔性** 〈3〉**怪物**
〈4〉**髑髏** 〈5〉**横死** （全5巻）

各巻 B6判変型・上製・64頁
定価 各巻 1,650円（税込）

大阪市中央区淡路町4-3-6
TEL06-6231-9010 Fax06-6233-3111
千代田区神田神保町1-2 TEL03-6811-0662

「国語の時間」と対話する　五味渕典嗣

教育から考える
新学習指導要領、教科書、そして教室での実践を読み解き、改革の矛盾と国語科教育を問い直す。
2420円

万葉集の歌とことば　佐佐木隆

姿を知りうる最古の日本語を読む
歌を丁寧に読み解くことにより、ただ素朴なだけでなく深く豊かな表現の世界と、人々の飾らぬ心とを浮き彫りにする。
2860円

チベットの昔話　アルバート・L・シェルトン

人跡未踏、神秘感漂うヒマラヤ山脈の麓で、焚火に向かい楽し気に語られた神秘的な昔話・民話を紹介。
2200円

青土社　東京神田神保町 ☎03-3294-7829
http://www.seidosha.co.jp/（価格税込）

『人文会ニュース』バックナンバー公開のお知らせ

1973年6月に第1号を発行した『人文会ニュース』も既に100号を超えて久しく、読者の方からは過去の記事を読みたいという希望が寄せられることも多くなりました。

また会員社の移り変わりもあり、人文会として保存をしておく必要性も高まり、本会創立50周年の事業としてバックナンバーのデジタル化に取り組みました。このたび一般に向けて公開することになりましたので、是非ご利用いただければ幸いです。人文会ウェブサイト、または下記のURLから閲覧ください。

URL　http://jinbunkai.com/contents/backnumber/

名著の誉れ高い「新しい古典」、
待望の邦訳！

ドイツ史
1800-1866

市民世界と強力な国家

上 下

トーマス・ニッパーダイ　大内宏一訳

19世紀の幕開けから普墺戦争まで、ナポレオンからビスマルクまでを網羅する、泰斗による本格的な歴史書。バランスのとれた解釈の「全体史」。

●上7150円・下7700円

白水社　東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811　＊価格税込

現代最高の知性が「いま」明かす思考の極意!!

佐藤優氏、橋爪大三郎氏、安田洋祐氏絶賛！

重版続々！4万部突破！

エマニュエル・トッドの思考地図

エマニュエル・トッド　大野舞 訳

定価1630円（電子書籍も配信中）

現実を的確に分析し、時代の先を読む思考をいかにして手に入れるか。完全日本語オリジナル。

筑摩書房　営業部 03-5687-2680
＊定価は10%税込です。
https://www.chikumashobo.co.jp/

デジタルリマスター版カラーで鮮明に――幕末明治日本の真の姿。

幕末明治大地図帳

輯製（しゅうせい）二十万分一図

監修●清水靖夫、今尾恵介

明治22年の「市制・町村制」で消えた約8万の旧町村名を掲載。索引も充実、失われた98パーセントの地名がよみがえる！

A3判／定価49,500円（10%税込。函入り・索引付き）

平凡社　〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 3-29
tel 03-3230-6573　fax 03-3230-6587
https://www.heibonsha.co.jp

東京大学出版会 創立70周年記念出版

大国はなぜ消滅したのか？

国家の解体

ペレストロイカとソ連の最期

塩川伸明

超大国・ソ連がわずか7年の間に瓦解した姿を克明に描く、渾身の書き下ろし。

函入3分冊・41800円（税込）

東京大学出版会
〒153-0041　東京都目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069　FAX 03-6407-1991
http://www.utp.or.jp/

大河ドラマ『青天を衝け』時代考証を務める
渋沢史料館館長による渾身の一作！

渋沢栄一伝

井上 潤 著

道理に欠けず、正義に外れず

＊四六判美装カバー 306頁 2640円

民業発展と社会改良に邁進した生涯

渋沢栄一

武田晴人 著

よく集め、よく施された

［ミネルヴァ日本評伝選］

＊四六判上製カバー 256頁 2750円

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税込／宅配可

法政大学出版局
http://www.h-up.com/

《叢書・ウニベルシタス 1127》

プルーストとシーニュ〈新訳〉

G.ドゥルーズ 著／宇野邦一 訳

シーニュ，文学機械，スタイル，狂気の現前と機能などで『失われた時を求めて』の世界を変貌させたプルースト論。その決定版を新訳。 3300円

《サピエンティア 60》

正義と差異の政治

I.M.ヤング 著／飯田文雄，苅田真司，田村哲樹 監訳／河村真実，山田祥子 訳

ロールズ以降の正義論に根本的な反省を迫り，フェミニズム理論や多文化主義論に多大な影響を与え続ける政治哲学の古典的名著。重版２刷出来 !! 4400円

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3
☎ 03（5214）5540 ／表示価格は税込です

〝恋愛〟で歴史が動く!?

恋する日本史

涙誘う純愛から不義密通まで。

『日本歴史』編集委員会編 2200円

無名の人物が貫いた純愛、異性間に限らない恋心、道ならぬ恋が生んだ悲劇…。天皇・貴族から庶民まで、日本史のなかの恋愛エピソードを紹介する。【2刷】

人物叢書

幣原喜重郎（しではら）

種稲秀司 著 平和をめざして尽力した国際人。2640円

大伴旅人（たびと）

鉄野昌弘 著 『万葉集』等に多くの作品を残した歌人・政治家。2420円

吉川弘文館 東京都文京区本郷7-2 ☎03-3813-9151 税込

もう一つの衣服、ホームウエア

武田尚子 外着でもあり下着でもある、曖昧で自由な衣服「ホームウエア」。変遷と作り手の歴史を跡づける小史。 三九七〇円

ナチス絵画の謎

逆襲するアカデミズムと「大ドイツ美術展」

前田良三 ナチス美術とは何であったか。ツィーグラーの絵画『四大元素』読解を軸に、複合的に全体像に迫る。 四八〇〇円

ハンナ・アーレント

〈世界への愛〉の物語

ヤング＝ブルーエル その生涯と活動と著作と思考のすべてを描いた不朽の伝記第二版の新訳。 大島・矢野他訳 八六六〇円

芸術の補助線

私の美術雑記帖

酒井忠康 不透明な時代の中で美術館の仕事をめぐって考えた事がらを書きとめてきた〝館長の雑記帖〟最新版。 三九六〇円

みすず書房（税込）
東京本郷2-20-7 www.msz.co.jp

囚われし者たちの国

世界の刑務所に正義を訪ねて

バズ・ドライシンガー
梶山あゆみ 訳

刑務所とは懲罰施設なのか、更生施設なのか。受刑者の社会復帰を支援する著者が9か国の刑務所を訪ね歩いた必読のルポルタージュ。▼税込2310円

紀伊國屋書店 出版部：東京都目黒区下目黒3-7-10 営業TEL03(6910)0519

気候危機が要請する革命のビジョン

グレタ・トゥーンベリ氏、斎藤幸平氏推薦！

地球が燃えている

気候崩壊から人類を救う
グリーン・ニューディールの提言

ナオミ・クライン 著　好評2刷
中野真紀子・関房江 訳　46判・2860円

「ロゴだけSDGs」になってませんか？

日本のSDGs

それってほんとにサステナブル？

高橋真樹 著　46判・1760円

東京文京本郷2-27 大月書店 電話03-3813-4651
otsukishoten.co.jp （税込価格）

慶應義塾大学出版会
https://www.keio-up.co.jp/

感情の哲学入門講義

源河亨著　大学の学部生向けの人気講義が一冊に！　哲学を知らなくても、感情や人間がどういうものか、哲学がどういうものか、よくわかる。◎2,200円

民俗学の思考法

―〈いま・ここ〉の日常と文化を捉える

岩本通弥・門田岳久・及川祥平・田村和彦・川松あかり編　民俗学の基本的な考え方を初学者向けに解説する決定版テキスト！　重要な概念や人名、事例などを解説するキーワード集36を収録。◎1,980円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

御茶の水書房

震災復興と生きがいの社会学

―〈私的なる問題〉から捉える地域社会のこれから

望月美希 著　A5判・三〇四頁・（税込）八五八〇円

東日本大震災から10年、被災者のこころの復興にむけて、被災地域復興から地域再生へ。復興に向かう人々を記録。

仮設住宅 その一〇年

―陸前高田における被災者の暮らし

宮城孝・山本俊哉・神谷秀美・陸前高田地域再生支援研究プロジェクト 編著　菊判・三六二頁・（税込）七一五〇円

日本の災害史上前例がない長期に及ぶ仮設住宅暮らしの実態を検証。研究者・実務家による10年間の模索と提言。

東京都文京区本郷5-30-20 ☎03(5684)0751

2021年4月25日発行　年3回発行　第137号
発行所　人文会
〒113-0033　東京都文京区本郷2-20-7　みすず書房内
編集協力　アジール・プロダクション
印刷　中央精版印刷株式会社

〈非売品〉